

第1回 袋井宿1 その始まり

田原村は、明治22年に彦島の名倉太郎馬らが中心となって、現在の袋井・磐田市境にできた静かな農村でした。大正14年の国勢調査を見ると、398世帯、2,159人の人口で、米・茶・甘藷・煙草を産し特に野菜の栽培が盛んでした。

村名の由来は、村内を流れる「太田川」と「原野谷川」から一文字ずつとって「田原村」と名付けたそうです。当時の田原村には、玉越、西島、三ヶ野、明ヶ島、彦島、松袋井、新池の7つの大字がありました。村の境界は、東は木原・高尾に接し、南は諸井・長溝・新貝に接し、西は西貝・大久保に接し、北は岩井・小山に接していました。

田原村では、昭和29年春頃から合併問題が持ち上がり、磐田派と袋井派の意見が対立して大騒ぎになりました。村内ではたびたび県の仲介を受けて話し合いが持たれ、昭和31年についに磐田市と合併することになりました。しかし、同時に新池・松袋井・彦島の一部は分かれて袋井市に編入する「分村合併」となり、長い村の歴史が終わりました。この頃、県内には合併に伴う騒動が各地に起こりました。静岡県人は昔から郷土を愛する気持ちがより強かったのでしょうか。(Y)

参考文献

『静岡県市町村合併沿革誌』(S317 シ)

第2回 袋井宿2 どんな景観？

見附宿・掛川宿の開設に遅れること15年、1616(元和二)年によく開設された袋井宿が、当初はどんな景観をしていたかは、残念ながらわかりません。

袋井宿の内容を記した記録や絵図、絵画は、いずれも江戸時代の終わりの、1800年代のものだからです。過去の資料はよほど、意識をしないと、残りません。

じっさいに歴史が伝わるには、多くの困難が伴い、袋井宿も例外ではありません。

1843(天保十四)年の調査をまとめた『東海道宿村大概帳』には宿内の町並みが東西5町15間(約570m)、総家数は195軒で、その内には本陣3軒、旅籠屋50軒が含まれ、人口は男379人、女464人、合わせて843人というものです。

これは、県内に所在する22宿と比較すると小規模ですが、その特徴は、全軒数の3割近く(見附宿は5%、掛川宿は3%)までが宿泊施設であり、旅客の宿継・休泊業務によって支えられた宿ということがいえます。

しかし、宿の最大の任務は何と言っても、人馬提供による荷物などの継ぎ送り業務でした。これを実際に行う場所が人馬継問屋場で、本町に一ヶ所存在し、宿役人たちが交代で詰めていました。(山)

参考文献

『東海道と袋井宿 -どまん中袋井宿の今昔-』 (S234 ト)

第3回 袋井宿3 復元模型を作ろうか?(前編)

袋井宿に関する記録や絵図、浮世絵はいくつかが残されているのですが、どうも、具体的なイメージが頭に浮かんでできません。そこで、景観復元模型を作り出すことを計画したわけです

ヒントになったのが、磐田北小学校玄関ロビーの壁に、何年も前の六年生が卒業記念として作った見付宿の景観復元模型が掛けてあり、それが、実に、味わい深い空間を醸しだしていたからでした。

さて、実際に作製するとなると、資料集めから始まります。ただ単に、街道の両側に家並みが集中する模型では、「ただの宿場」で「袋井宿」にならないからです。

ところが、残されている資料は、本当に、断片的な情報に過ぎず、余りにもわからないことが多いことに改めて気付かされます。

全体的な形状は「袋井宿絵図」で知ることができますが、驚いたのが宿の廻りに土塁が描かれていることで、これは、大正時代の「天橋」の写真にも写っています。原野谷川に隣接する宿を水害から守るためでしょうか。

さて、本当に景観模型は完成するのでしょうかね。(山)

参考文献

『東海道と袋井宿 -どまん中袋井宿の今昔-』(S234 ト)

第4回 袋井宿4 復元模型を作ろうか?(後編)

景観復元模型を作るには、できるだけ正確な地形図が必要です。袋井宿には、幸い宿場に相当する現在の町並一軒一軒の区画と、江戸時代終わり頃の家並みを、大まかに重ねて復元した図がありました。これを500分の1の縮尺に拡大し、白いパネルにカーボン紙で写し、土台部分ができあがります。

つぎは家の構造です。参考となる幕末の東海道の宿場の写真を見ると、江戸に近い宿場は瓦屋根で低い二階屋が多いのですが、離れると意外に、茅葺き屋根の平屋が多いことに気付きます。

復元といっても、袋井宿のあった250年間で家の構造がわかる資料はありません。最も近い1915年(大正4年)の町並みの写真では、殆どの家が瓦屋根の二階屋ですが、1800年頃となると、どうも怪しい。

そこで、旅籠や一般の家は板屋根で、平屋と二階屋の両方を想定、本陣は瓦屋根、社寺は茅葺きにしました。

問題は、材料です。小さな家を加工するには? 試行錯誤の結果、消しゴムが最も加工しやすく、複雑な本陣の建物はクラフト紙を使い、彩色して仕上げ、見事な袋井宿が出現しました。(山)

完成した模型は、袋井市郷土資料館で常設展示しております。

参考文献

『遺跡でたどる袋井のあゆみ 第5弾』(S234 イ 5)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第5回 袋井宿5 本陣のことを知ろう(前編)

本陣というのは一般の人は利用できず、大名や家臣などの武家、宮家・公家・位の高い僧侶などが休憩をしたり、宿泊したりする施設のことをいいます。

その構造の特徴は、格式を表す門構えと玄関があり、内部に高貴な人がいる部屋「上段の間」(天井が高くなっていたり、床が一段上がっていたり、違い棚があったりします)を設けていることです。

袋井宿には、東本陣と呼ばれた田代家、中本陣と呼ばれた大田家、西本陣と呼ばれた大田家の三軒があり、このうち、最も規模が大きいのが東本陣で、敷地の坪数は1068坪(3530平方メートル)、このなかに建坪288坪(952平方メートル)の建物群があり、街道に面した間口が13間半(25メートル)、奥行き31間(57メートル)もの規模を持っていました。

本陣の主な収入源は休憩料と宿泊料ですが、特に決められた基準はなく、「御祝儀」という性格の物で、金銭だけではなく、羽織や反物、色紙などで支払われることも多かったようです。幕府から下賜金や補助がありましたが、足りず、建物を維持するだけでも大きな赤字で、名誉職のようなものでした。(山)

参考文献

『遺跡でたどる袋井のあゆみ 第5弾』(S234 イ 5)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第6回 袋井宿6 本陣のことを知ろう(後編)

残念なことに袋井宿には、三ヶ所あった本陣の建物は残っていません。しかし、東本陣が建っていた場所の一部は、東本陣公園として旧東海道に面した約334平方メートルが整備され見ることができます。

東本陣の跡地については、平成3年と4年にそれぞれ一週間ずつ発掘調査が行われ、平成4年の調査では最後の時期に相当する建物の礎石、それを方形に取り囲む雨落ち溝が見つかり、さらに三次期にわたる焼土と炭化物が混じる土層があることも確認されました。

このうち、二番目の焼土の層の下からは地震で発生した液状化現象の痕跡である「噴砂(ふんさ)」が観察され、しかも、それは二番目の焼土の下で止まっていました。これは、地震によって火災が発生した証拠で、同じ土層に含まれている陶器などの年代から1854年の安政大地震に伴うものとみられています。

三次期にわたる焼土の存在から、18世紀後半～19世紀前半だけでも20～30年に一度の周期で袋井宿が大規模な火災に遭っていたことがわかります。(山)

参考文献

『袋井宿－東(田代)本陣－』(S202 フ 1)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第7回 袋井宿 7 どこまでが袋井宿？

今回で、7回にわたって紹介した袋井宿は一度、終わりにします。

では、最後に、一体「袋井宿」とはどこからどこまでを指すのか、御案内しましょう。

実際には東西二つの「御料傍示杭」という杭が設けられており、これによって宿場の範囲は明確に別けられています。つまり、この杭と杭の間が「袋井宿」なのです。絵図を見ると、街道に沿って家並は、すきまなく続くけれども、東側の杭の外側は袋井村、西側の杭の外側は川井村として別けられています。

イメージとしては、街道に沿って家がすきまなく並ぶ町場の景観を漠然と「宿場」と呼ぶのだと、私も理解していたのですが、大きな間違いでした。(山)

参考文献

『東海道分間延絵図』（R291 ト 10）

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第8回 一里塚1

今回からしばらくのあいだ、一里塚を見て行きましょう。

一里塚というのは、一里（約4キロメートル）ごとに造られた距離の目印で、土を盛り上げ、その上に榎（えのき）や松を植えた塚のことです。

はじまりは、中国にならい、奈良時代(8世紀)に造られたといいますが、くわしくはわかりません。その後、織田信長や豊臣秀吉は自分が支配する土地の街道に一里塚を造り、これを引き継ぐ形で、江戸に幕府を開いた徳川家康が全国の街道に一里塚を造らせました。

東海道の整備は1601年(慶長6)に始まり、江戸日本橋を起点に一里ごとに一里塚が造られました。

旅人は一里塚を距離の目印として歩き、くたびれると木陰で休んだり、馬や駕籠に乗ったときは、代金支払いの目安にしたといえます。

その規模は、記録によると直径が五間（約9メートル）、高さが一間半(約2.6メートル)と、かなり大きなもので、街道をはさんで左右両側に向かい合って造られました。

袋井市内には東海道60番目の久津部一里塚と、61番目の木原一里塚の二ヶ所、計4基がありました。（山）

参考文献

『東海道分間延絵図』（R291 ト 10）

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第9回 一里塚2 木原一里塚の復元

旅人の目印として親しまれた一里塚も時代が変わって明治時代になると鉄道の登場や交通手段の変化により、歩いて旅をすることがなくなり、役割を終えてしまいます。そして、自動車が登場すると、道路を広げる工事などで削られ、袋井市内にあった二ヶ所、四基の一里塚も姿を消してしまいました。

一里塚のあった木原地区では、有志の方々が集まり、なんとか昔の姿を復元したいという想いで「木原一里塚復元研究会」を結成し、教育委員会と一緒に周辺の一里塚の発掘成果や文献資料の調査、塚の上に植えられていた樹種の調査や樹木の選定を行い、その結果をもとに復元設計図が作成されました。

設計の要旨は、

江戸時代前期(17世紀)の姿を基本とし、移植する樹種は榎(えのき)とすること。

古文書類から塚の直径は五間(約9メートル)、高さは一間半(約2.6メートル)とすること。

各地に残る一里塚の敷地の平面が多角形であることから、下段に石積み三段の方形基壇を設けること。

これらをもとに平成11年3月に、もとあった場所の西側約60メートルの地点に「平成の木原一里塚」が復元され、当時の姿を現しました。(山)

参考文献

『東海道分間延絵図』(R291 ト 10)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第 10 回 一里塚 3 久津部一里塚

袋井市内には、木原一里塚の他にもう一ヶ所、久津部の一里塚がありました。

『東海道宿村大概帳（とうかいどうしゅくそんだいがいちょう）』という江戸時代の記録には、
「(掛川)宿より袋井宿迄之間壺里塚貳ヶ所 壺ヶ所 但左之塚 下貫名村地内 右之塚 久津部村地内
木立松」と記されています。

久津部一里塚は東海道を日本橋から数えて 60 里目の一里塚といわれます。描かれた資料には、
『東海道分間延絵図』があり、その部分が下の写真です(テキスト版は写真なし。お手数ですが
pdf 版をご覧ください)。

東海道をはさんで上に描かれた北側の塚は久津部村の地内に、下に描かれた南側の塚は下貫名村
の地内となっていました。

よく見ると久津部村側の一里塚の前には、高札が描かれています。高札とは法令や禁令などを板
札に墨書して掲示したもので、村役人が責任をもって厳重に管理し、矢来(柵)がめぐらされ土盛
りがなされていました。絵をよく見ると、確かに屋根と囲いが描かれていますね。(山)

第 11 回 一里塚 4 久津部一里塚の復元

残念ながら袋井市内には二ヶ所、計 4 基造られた江戸時代の一里塚は役割を終えて削り取られ、一つも残っていません。

しかし江戸日本橋から数えて 61 番目の木原一里塚が旧東海道の南側で、もとあったところから西に 60 メートルの場所に、昔の姿と規模にもとづいて平成 11 年に復元されました。

60 番目の一里塚である久津部一里塚は、北側が住宅地となりましたが、南側は袋井東小学校の敷地として、具体的な場所が伝わっていました。

その場所には昭和 47 年に東小学校の創立 100 周年を記念して一里塚碑が建てられ、平成 4 年には「久津部一里塚」の説明版が掲げられ、平成 12 年 8 月には、翌年に東海道宿駅制度ができて 400 周年をむかえることから、「東海道の歴史的遺産を生かしたまちづくり」の一つとして、一里塚が復元されました。

実際の一里塚の規模は高さ約 2.6 メートル、直径約 9 メートルもある大きなものですが、とてもかわいらしい一里塚が、明治 10 年(1877)に刈られるまで立っていた松の木を植えて復元されました。(山)

参考文献

『袋井市文化財パンフレット第 16 集 見学ガイド 久津部一里塚』(R293 フ)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第 12 回 東海道の松並木

東海道を代表する景観といえば、街道の両側に続く松並木を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。

東海道への植栽は幕府が命じ、道中奉行が管理をしていました。その命令は大変厳しく、下草の伐採を怠慢なく行うよう命じたり、枯死した木といえども道中奉行の許可なく勝手に伐採したりすることは許されませんでした。

しかし、明治以後には管理体制が崩れ、伐採や枯死など、なるがままにまかせて、現在では非常に希少なものとなってしまいました。

平成 7 年に「東海道の松並木を考える会」によって実態調査がおこなわれ、袋井の松並木は、名栗地区から木原地区にかけて残されていましたが、そのほとんどが名栗・上貫名・久津部・新屋に集中し、本数は 105 本、樹齢は 200 年前後ということがわかり、中には太さが腰高幹囲で 253 センチ、直径 80 センチある立派なものが含まれていました。

袋井の松並木は木とともに土盛りが残っているのが特徴で、路面からの高さがかつては 1 メートル以上もあり、子供では簡単に登ることができませんでした。(山)

参考文献

『東海道の松並木調査報告』（S682 ト）

『東海道の松並木調査報告Ⅱ』（S82 ト 2）

※袋井市の歴史を調査研究の場合は袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第 13 回 白山信仰と袋井 1

徳川の時代が終わり、明治維新を迎えると同時に、宗教界に激震が襲いかかりました。一般に「神仏分離令」と呼ばれる政府の命令によって、全国の神社から仏教色の排除が急速に進められ、神社名・祭神の変更、仏像・仏具の撤去(焼却が多かった)、境内に建つ塔や仏堂という仏教建物の取り壊しが全国でおこなわれ、多くの文化遺産と、これに携わり生活していた人々の暮らしが無くなりました。

その一つに、白山信仰があります。みなさんは白山というと「加賀の白山だね」と、頭に思い浮かぶのではないのでしょうか。しかし立山連峰と並ぶ北陸の雄、白山連峰は加賀(石川県)・飛騨・美濃(岐阜県)・越前(福井県)の三県にまたがり、そのうち、東海地方と直接関わるのは、「美濃の白山」です。

明治になるまで、東海地方から向かった場合の白山連峰への登拝拠点に「美濃馬場(みのばんば)」と呼ばれた、長瀧寺(ながたきでら)を中心とする宗教都市がありました。現在は岐阜県郡上市白鳥町長滝という地名の場所です。

法多山の田遊びは長瀧寺の田遊びを原型とし、法多山・油山寺の鎮守として今も境内に祀られる白山神社、それに浅羽地区松原の王御前神社などもこの長瀧寺の系統で密接な関わりを持っていました。(山)

第 14 回 白山信仰と袋井 2 法多山鎮守のルーツ

寺院には、目に見えない異界や霊界から仏法を守護するため、多くの神々が祀られ、これを伽藍神(がらんしん)(伽藍鎮守)と言います。厄除け観音として有名な真言宗 法多山尊永寺(はったさんそんえいじ)も例外ではありません。

毎年 1 月 6 日におこなわれる「田遊び祭り(たあそびまつり)」は、伽藍鎮守である白山権現(ごんげん)(権現とは天台密教の思想で、山の神が仏として出現したもの)の神事なのです。

この白山権現は美濃白山中宮長瀧寺(みのはくさんちゅうぐうながたきでら)(岐阜県郡上市白鳥町長瀧)から勧請(かんじょう)(神霊を分祀すること)されたもので、長瀧寺と尊永寺は真言ネットワークによって、密接に結びついた寺院で、それは室町時代、15～16 世紀のことと考えられます。

長瀧寺の特徴は、本堂が無く、白山五社の社を中心として仏教建築が並び、その中心が大講堂で、そこに山内の宗教者が集まり、話し合いで運営を決める、修験道独特のスタイルでした。
(山)

第 15 回 白山信仰と袋井 3 法多山田遊びのルーツ

美濃馬場 長瀧寺では、明治になるまで山内の僧侶・修験者・神職が拝殿内に会して、新年を迎える延年(えんねん)という行事をおこなっていました。

古代より続く密教寺院では正月行事を修正会(しゅしょうえ)と呼び、そのなかの延年には芸能が伴い、きらびやかなものでした。さまざまな神事と、芸能が繰り広げられ、新たな歳神を丁重に迎えていたわけですが、明治初期の神仏分離政策によって、多くが衰退し、今では平泉毛越寺と白山長滝神社(元の長瀧寺)とが中世の形をどうにか留めているとして、国指定重要無形民俗文化財に指定され継承されています。

延年の最終は1月10日で、神前に釈迦如来の仏画を掲げ、その前で「大般若経」という国家鎮護の威力持つ経巻600巻が多く僧侶により転読されます。

これに先だつ6日に白山長滝神社では延年である六日祭があり、その演目に法多山田遊びの原型となる「しろすり」などがおこなわれます。

翌7日が法多山田遊び、最終日の10日が、磐田市中野(旧福田町)の十日祭と、全て美濃白山長瀧寺に関連した神事です。(山)

第 16 回 白山信仰と袋井 4 白山神への献供菓子

白山長滝寺(現在は白山長滝神社)の延年に際して、山の神である白山神に供えられる菓子があ
り、これは酒宴における酒の肴を顕わします。

台の上に四隅と北・南・東に各 3 個ずつ 21 個の丸餅を置き、その内側に串柿を並べ、一面に、三
升のはぜ米を敷き詰めます。この中には煎大豆・胡桃・栗・干梅という山の幸がたくさん混じっ
ています。

西側には洗米を白山山頂の三つのピーク(大御前峰・大汝峰・別山)になぞらえて盛り上げ、周囲
に紙を貼った箱形の「行灯(あんどん)」を被せ、横に、依り代の松を立てます。

神前での神事が終わると「行灯」は外され、菓子は参詣者に振る舞われます。

このような白山神へ献じた菓子は、延年の芸能と共に法多山と中野に伝わり、その名残は中野で
は十日祭の御供として、白山に見立てた洗米の山に細かくした干柿を混ぜ、頂上に柿と松の枝を
添えます。

法多山田遊び祭では、舞を奉納する村方が準備をおこなう、公会堂内に供えられる餅とオシキメ
シとして今も伝わり、出発に先だち御神酒とこれを口に入れて浄めた後、出発します。(山)

第 17 回 白山信仰と袋井 5 法多山田遊び花笠のルーツ

これまで、法多山田遊びが美濃(岐阜県)白山中宮長滝寺(現在は白山長滝神社)からもたらされたことを紹介し、具体的な類似点を示しました。

今回は田遊び第七段に演じられる「そうとめ(早乙女)」に登場する 10 人の早乙女の衣装のうち、頭にかぶる花笠のルーツを紹介しましょう。

法多山田遊びの前日(1 月 6 日)に、白山長滝神社で延年が催され、その会場となる神社拝殿土間の天井には巨大な花笠が 5 基(桜・菊・牡丹・椿・芥子)つり下げられます。

これが花笠のルーツで、このような形になったのは昭和 20 年代とのこと。

もとは子どもがかぶったようですが、祭りに集まった民衆が福をもたらすという花笠を奪い合い、誤って首の骨を折る事件が起きました。それ以後、このように巨大化させ、天井につって奪い合う形となりました。法多山には、古い形が残っているわけです。(山)

第 18 回 白山信仰と袋井 6 赤尾山の白山神

高尾に所在する赤尾洪垂郡辺神社(あかおしぶたれこうりべじんじゃ)の場所は、赤尾山長楽寺(あかおさんちょうらくじ)という真言宗の寺院でした。この寺院は、明治初めの神仏分離政策によって廃寺となり、神社に変わったわけです。

寺の歴史に関しては「長楽寺由来記」という古記録と、天保六年(1735 年)に領主に提出された書類の写しが残されていて、江戸時代後期(19 世紀)のようすと、この当時寺に伝えられていた由緒の内容を知ることができます。

どこの寺院も同じことですが、実際の創建についてはわかりません。この書類には「後白河帝の御宇保元二年丁丑年春本堂諸伽藍御再建これあり此時改めて赤尾山長楽寺と号す」と書かれています。保元二年とは 1157 年で、付近から採取される土器の年代や法多山尊永寺(はったさんそんえいじ)と関わりが深いという状況証拠などから、平安時代後期頃に創建された可能性が考えられるので、この年代は妥当なところでしょう。

江戸時代(17 世紀以降)には高野山普門院(こうやさんふもんいん)の末寺となり、朱印高(しゅいんだか：幕府から認められた寺社の土地からの収穫高のこと)が 15 石でした。室町時代には坊院(寺を構成する子院)には吉祥院・安寿院・拾楽院・善養院・大乘院の 5 カ所がありましたが、戦国時代の争乱やその後の火災で衰退し、最後には大乘院・善養院が残り、このうち大乘院が別当(今の住職にあたります)という寺を取りしきる立場にありました。

建物は南西方向に開いた谷地形を利用して建てられ、谷奥の現在の神社本殿の場所には本堂にあたる阿弥陀堂が、南側の尾根上には寺院鎮守の白山社が、西側の尾根側には多宝塔が建っていたようです。(山)

第 19 回 白山信仰と袋井 7 赤尾山の白山神 2

寺院には、仏法を守護するための鎮守神(ちんじゅがみ)というものが祀られています。これには、宗派そのものを守護する神々、寺院の境内(伽藍(がらん といいます))を守護する伽藍神、もともとその土地に祀られていた神々を寺院建立後にも祀った地主神(じぬしがみ)など多様な内容があります。

法多山を中心として小笠山西麓に置かれた真言寺院群(赤尾山長楽寺・篠ヶ谷山岩松寺)は全て白山権現を鎮守として祀ります。

赤尾渋垂郡辺神社(あかおしぶたれこうりべじんじゃ)の場所に明治初期まであった、赤尾山長楽寺(あかおさんちょうらくじ)の鎮守神 白山権現を祀った建築物が今も残っています。神社境内に上がる石段を登った右側の小高い丘の、摂社(せっしゃ)(本社とは別にその神社の管理下にある小社)白山神社がそれで、その本殿として使われているのが、もと、白山権現の宮殿(くうでん)です。宮殿とは、仏像や祖師像を納める厨子で、ここには白山権現の中心、大御前神(おおごぜんしん)が仏の姿で顕れた、十一面聖観音像が納められていたわけです。

この宮殿は天正 16(1588)年 2 月 18 日に法要を行い、納められたことがわかっており、袋井市指定文化財となっています。神と仏がごちゃごちゃになってわかりにくい？それが、明治以前の実態でした。(山)

第 20 回 白山信仰と袋井 8 松原王御前(おうごぜん)神社と白山 1

今回から数回にわたり、旧浅羽町の松原地区に所在する、王御前神社と白山信仰とのかかわりについて紹介しましょう。

江戸時代後期の松原村は、通称「浅羽三十三ヶ村」と言われた村々のなかでは最も規模が大きく、戸数は 150 戸、米の生産高は 1229 石あり、横須賀藩領でした。

村は東組・西組にわかれ、村内には「七寺八門」といわれる七ヶ所の寺と堂(岡崎竜巢院末寺の松原庵・法恩庵・養正寺・見徳寺・普泉寺・東正寺、これと阿弥陀堂)、八軒もの門構えを持つ格式の高い屋敷があり、非常に豊かな村でした。

この松原村の鎮守様が、王(大)御前神社です。幕末に横須賀藩校の教授を務めた、八木義穂がまとめた『郷里雑記(ごうりざつき)』には「大御前の神、今は王御前とも書いている。同社には津島神・子安も祀られている―大御前とは梅山八幡神社の母神という―(現代語訳に改める)」と書いています。

この記載は実に重要で、神社の名前は、今は王御前とも書くが、本来は「大御前」だよと、いつているわけです。地元では王御前神は八幡神の母神と伝えているわけですが、八幡神の系統には王御前神という名称は存在しません。ところが、「大御前神」ならば、白山大御前神が有名です。八幡の母神ではないの？ じっくり、この謎を解いてゆきましょう。(山)

第 21 回 白山信仰と袋井 9 松原王御前(おうごぜん)神社と白山 2

神社の由来や歴史を知るのは、意外と困難な作業なのです。

それは、明治初めの神仏分離政策と、廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)という、仏教排除の運動が全国的におこなわれたからで、明治初めに寺院が神社になったり、神社内の仏教施設(堂・塔)をはじめ、仏像・仏具・経典の破壊、焼却がおこなわれ、神社に生活していた社僧と呼ばれる僧侶たちも、追い出され、祭神を変更することや、新たな歴史や由来が作られることが一般的だったからです。

王御前神社には、江戸時代の棟札(むなふだ)が4枚残されていました。棟札とは建物を新築したり、修理したときに、その記録として納めた木札のことで、その時の生の、情報を得ることができます。その棟札中最古のものが元禄13年(1700)に本殿を新築したときのもので、そこに「赤尾山 長楽寺」と記されています。これは、赤尾洪垂郡辺神社(あかおしぶたれこおりべじんじゃ)の前身、長楽寺のことなのです。(山)

第 22 回 白山信仰と袋井 10 松原王御前(おうごぜん)神社と白山 3

王御前神社に残された元禄 13(1700)年の最古の棟札を記したのは真言寺院、赤尾山長楽寺の密教僧でした。

まず表の中心には梵字(ぼんじ)が書かれています(前号の写真参照)。これは種子(しゅし)といい、ひと文字で仏一尊を顕わします。中心に阿弥陀如来を顕わす「キリーク」を記し、その下右には阿弥陀如来の左脇侍(わきじ)となる観音菩薩の種子「サ」、下左には右脇侍となる勢至菩薩の種子「サク」を配置して阿弥陀三尊を顕わします。

中央には「奉建立一字社等郷内安穩悉地圓滿所」と記し、元禄 13 年に本殿を含めて社殿の建物が新たに建立されたことがわかります。

この記載内容から何が読み取れるのでしょうか？それは、王御前神社が元禄 13 年に阿弥陀三尊を本地仏(ほんじぶつ)として建立され、その法要を八月吉日(この場合は 8 月 13 日の祭礼日)に長楽寺の密教僧を導師として落慶法要を執り行ったということです。

読者は奇異なことに思われるかもしれませんが、明治以前には、こうしたことは普通で、専属の神主が居る神社は、殆どありませんでした。これは、経済力の問題で、神主家が生活できるだけの、土地(朱印地・黒印地)を所有する神社は少なく、多くが祢宜屋(ねぎや・ねんや)とか、鍵取りと言われる、在俗の家で、神主役を世襲でおこない、普段の神社の管理をつとめていました。

大事な法要や祭礼には、真言・天台の密教寺院の僧侶が導師としてお宮に出向き、読経や儀礼をおこないます。王御前神社は、長楽寺の僧侶が出入りする神仏が一体となった神社でした。(山)

第 23 回 白山信仰と袋井 11 松原王御前(おうごぜん)神社と白山 4

王御前神社は江戸時代には、赤尾山長楽寺の密教僧が法要を務める場所であったことが、棟札資料の記載内容を検討することで明らかとなりました(21・22 回参照)。

江戸時代の神社の名称が「大御前」と記されていたのは、どうやら白山姫神の大御前と考えるのが正解のようです。それは長楽寺の鎮守そのものが白山権現であることを考えれば、妥当なところなのかなという気がします。八幡の母神も、白山の母神も同じという認識なのでしょう。そんなことがあるのか？と読者は思うかも知れませんが、様々な要素が重層的に混じり合い重なる日本の自然崇拝を基本とする信仰観では、このようなことは珍しくありません。重要なのは、母神であることなのです。

袋井市内では尊永寺・油山寺・岩松寺という真言寺院の鎮守は全て白山神で、西楽寺の鎮守十所権現にも白山神は含まれており、真言密教の拠点であった室町時代から江戸時代の太田川・原野谷川流域では白山神への信仰は身近なものであったようです。(山)

第 24 回 白山信仰と袋井 12 袋井・浅羽からの白山巡礼

四国八十八ヶ所巡礼、西国三十三ヶ所巡礼という特定の霊場を廻り、順番に礼拝する信仰が室町時代に成立し、今も盛んに行われていることは、多くの人が知っていることでしょう。

しかし、日本最大の巡礼道が袋井を通っていたことを知る人は、まず、いないはず。それは立山・白山・富士山の三山を廻り、中日本を1周する、全行程約332里(1300キロメートル)の「三山禅定(さんざんぜんじょう)」というものでした。禅定とは山岳修行を指します。

袋井からは東海道を西に進み、美濃国に入ってから、刃物で有名な関あたりから長良川沿いに、郡上市白鳥町に出る経路で、このルートは現在の東海北陸道と、ほぼ同じものです。

そして、美濃馬場(みのばんば)と呼ばれる宗教都市、長滝寺の山門に着きます。長滝寺については、このシリーズで何度か紹介してきましたね(第13から17回)。

ここまでの行程は、個人が勝手に旅をするのではなく、江戸時代初めの頃は長滝寺に所属する白山先達(はくさんせんだつ)と呼ばれる修験者が案内役を務めて導きました。

山門からの道案内は、次回にしましょう。(山)

第 25 回 白山信仰と袋井 13 袋井・浅羽からの白山巡礼 2

白山先達に導かれながら、長い道のりを美濃馬場(みのばんば)長滝寺に到着した遠州からの参詣者は、大門で長滝寺側に引き継がれる。この大門が目的地の白山に参詣するための登拝道である美濃禪定道(みのぜんじょうどう)の起点となっており、通行しないわけにはいかないのだ。

日本にヨーロッパの近代登山が導入されるまでは登山という風習は無かった。山は神仏がおわします聖なる場所。だからそこにあがるのは、神仏に出逢うために拝みに行くのが目的。何日もかけて、大変な思いをしてたどり着けば、それだけ感動も大きく、御利益があるという考えだ。だから登山ではなく登拝という言葉を使い、途中の行程は修行なので、山岳修行を指す「禪定」を使う。

参詣者は大門で関銭を払い、二通りある通行の経路を選択する。一般者が往来する禪定道を選んだ者は「表指し(おもてさし)」、山伏が通る尾根筋の厳しい修行路を通して途中で禪定道に合流する道を選んだ者は「裏指し(うらさし)」と帳簿に記入される。美濃馬場の宿坊に泊る者もいるが、ここから白山までの先達(案内人)は奥の石徹白(いとしろ)村から社人(しゃじん)と呼ばれる人が迎えに来ており、白山先達と交代をする。

延宝 8(1680)年の記録では尾張・三河の白山参詣者は 130 人、三禪定(白山・立山・富士)の巡礼者は 80 余人、遠江から三禪定の巡礼者 150 余人が短い夏の期間に大門を通過した。(山)

第 26 回 白山信仰と袋井 14 袋井・浅羽からの白山巡礼 3

東海地方からの参詣者が白山へ参拝するために利用した美濃禪定道(みのぜんじょうどう)は、美濃馬場(みのばんば)と呼ばれた宗教都市、長滝寺の大門から始まる。

大門から真っ直ぐに延びた参道の突き当たりにはどっしりとした長い拝殿があり、そのうしろには白山権現の社殿が5棟並んでいる。右から若宮・別山(べつさん)・白山大御前(おおごぜん)・大南智(おおなむち)・大將軍(だいしょうぐん)で、このうち左端の大將軍社は、老朽化して造り替えるときには室町時代から代々、遠江の人々がその財源を負担しており、遠江とはつながりの深い社殿だった。

「表指し(おもてさし)」という美濃禪定道のルートを選んだ参詣者は、寺坊や寺内町を抜けて、長良川の溪谷に沿って2キロほど進むと、道は左に大きく振れて前谷川の谷を遡ることになる。

ここからの道はだんだんと急になり、美濃国(岐阜県)と越前国(福井県)の国境をなす標高990メートルの檜谷峠まで一気に450メートル分登ることになるが、いったん横道にそれて、霊瀑阿弥陀ヶ滝を参詣するのが習いだ。

この滝は美濃馬場長滝寺という名称の根源となったもので、落差60メートルの規模と水量の豊富な滝は見る者を厳かな気持ちにさせる。

阿弥陀ヶ滝は白山を開いた泰澄(たいちょう)が722(養老6)年にこれを発見して「長滝」と名づけ、下流に長滝寺を開いたと伝えている。(山)

第 27 回 白山信仰と袋井 15 袋井・浅羽からの白山巡礼 4

比高差 450m におよぶ壁のような急斜面を登り切ると、ようやく標高 990m の桧峠に立つことができる。峠は越前と美濃との国境をなす山の稜線の一番低いところにあたり、アップダウンの著しい稜線は国境であると同時に、白山長滝寺の修験者達(山伏)が白山山頂へと向かう山岳修行、「鳩居入峰(はといにゅうぶ)」の修行道が通じており、これが峠で美濃禅定道と交差している。

峠の頂上はそれまでとはちがって 360 度の大パノラマが展開し、空が澄んで展望がきくときには、雄大な風景に思わず声をあげてしまうくらいだ。いつの頃から「桧峠」と呼ばれるようになったが、美濃・飛騨・越前の三国を見渡すことができるので、古くは「三国峠(みくにとうげ)」と呼ばれていた。

峠からみる正面の一带が、遠州を含んだ東海地方一円に白山信仰を直接伝え、遠州の人々を白山へ道案内した、「石徹白御師(いとしろおし)」の里、石徹白郷だ。そこは、白山山頂を構成する別山(べつさん・標高 2339m)の山の神である虚空蔵菩薩(こくぞうぼさつ)を祀る白山中宮(ちゅうぐう)の中居神社(ちゅうきょじんじゃ)があり、これに奉仕する社家(しゃけ・中居神社の神職を出す家)・社人(しゃじん・檀那場を廻り、宿坊を経営する御師)・末社人(すえしゃじん・山林の管理、物資の運搬をおこなう)という神仏に仕える者だけが暮らし、明治になるまで、どこの領主にも属さない特別の里であった。

遠州から長い道のりを歩いてきた参詣者の一行は、今日の宿泊所である御師の家を目指して峠からは一気にくだり、集落へと向かうのであった。(山)

第 28 回 白山信仰と袋井 16 袋井・浅羽からの白山巡礼 5

美濃馬場(みのばんば)と呼ばれる長滝寺から国境の険しい峠を越えて越前国石徹白郷に入った一行は、決められた御師(おし)の宿坊へと導かれる。

何より一行の目を驚かせるのが、山をあえぎながら上り詰めた先に予想を裏切る広々とした盆地が広がり、その廻りを 2000m 級の高山が取り巻く壮大な景観だ。

今でこそ石徹白は、人口百数十人の限界集落であるが、江戸後期には人口 600 人を越え、社家集落の上在所、社人集落の中在所・西在所・下在所と、末社人の三面(さつら)・小谷堂(こたんど)の 6 ヶ村から成り立っていた。

明治維新で世の中の仕組みが大きく変わり、御師の活動が無くなって 140 年。今では宿坊は全て廃絶し、鮎釣り客やスキー客相手の民宿として数軒が営業している。

遠州からの参詣者ゆかりの、ある旧宿坊を紹介しよう。石徹白の宿坊構造は、二階建ての場合、一階部分と同じ面積で二階部分を造る総二階となっている。二階には白山神の祭壇が設けられた「白山の間」があり、隣に仏壇の間がある。その前は襖を外せば広間となり、参詣客の布団をたくさん敷くことができる。一階は食堂と家族の部屋がある。

豪雪地帯のため、かつては傾斜の急な板屋根で石を置いて止めていた。家の傍らには雪かきをした雪を溶かす池があり、水が豊かなこの里では四六時中山からの水が循環して凍ることがない。家の廻りは石敷きで雪が解けやすくなるなど、さまざまな特徴がある。

この家には文化 13 年(1816)に京都の公家で神祇伯という役を仰せつかっていた白川家が出した、石徹白中居神社社人の免状「許状(きょじょう)」が残っている。(山)

第 29 回 白山信仰と袋井 17 袋井・浅羽からの白山巡礼 6

宿坊の朝は早く、3 時には起き出して身じたくを整える。今日から数日間は白山山頂を縦走する美濃禪定道最大の難所を進むことになる。山行きに必要な物はここで調達し、一行は宿坊の御師(おし)に連れられ出発だ

小一時間も歩くと、立派な銅(かね)の大鳥居に出る。見上げた神額には「白山中居権現」と記しており、ここが石徹白郷の要、中居(ちゅうきょ)神社の入り口だ。郷内の住人は総てこの神社に仕える神職というように、特別な関係で結ばれている。

御師の指導で、決められた作法の礼拝を済ませた一行は鳥居をくぐり、沢へ降りてゆくと、水量の豊かな宮川という清流があり、そこには二本の巨大な御柱(おんばしら)が渡してあり、「布橋」というのだと説明を受ける。

これは 40 年に一度付け替えられ、山中から大木を切出し、雪の中を村中総出で曳いてくる。ご神木でもある。

祭礼時には白布を敷き、これを踏んで通り、神の世界へと渡る。神事に参加し終わると再び布橋を通して「この世」へ戻ってくる。という具合だ。ちなみに、浜松市布橋は、この白山信仰の行事が伝播し、神事は早くに消滅したが、地名として残ったものだ。

布橋を渡り終えた一行は、中居神社の神域へ踏み込む。廻りは暗闇の中に樹齢千年を超える杉の霊木が林立し、霊気が一面に漂う。ここからが白山神の胎内だ。

松明に導かれた一行は神域を抜け「四十八瀬」という 5 キロ近い尾根道を幾つもの沢を渡り、清流で禊ぎ(みそぎ)をくり返しながら、今清水宿へと向かう。辺りはすっかり明るくなり持たされた塩むすびを、漬物をかじりながらほおぼり至福のひとときを過ごすのであった。(山)

第 30 回 白山信仰と袋井 18 袋井・浅羽からの白山巡礼 7

朝食が済むと、標高 1000 メートルを越える高山に朝日がまぶしく照りつける時間となっていた。目前には目通り 14 メートル、高さ 24 メートルにもおよぶ杉の大木(現在は石徹白大杉と呼ばれ、樹齢 1800 年とされる)をはじめとして、あたり一帯は杉の巨樹に覆われ、圧倒されるような神々しい靈気がみなぎる。

ここは今清水宿という、山伏達の籠堂(こもりどう)がある聖地で、周辺に神が宿るご神木の杉を植え、人工的に造った杜を守り続けてきた場所だ。

御師(おし)に導かれた一行は、祠に祀られている、山王(さんのう)さまと呼ばれる地蔵菩薩像を礼拝して勤行し、奥の「熊清水」と名づけられた水源で、竹筒の水筒に水を満たすと、本格的な禅定道をひたすら登る。

ブナの原生林に覆われた尾根筋に設けられた禅定道は、急な箇所もあるが、緩やかで、足元は腐食土を踏むので心地よく、太陽も遮り自然と一行のスピードは上がる。

2 時間ほど進むと、神鳩宿(かんぼとしゅく)という、籠堂に着く。ここには薬師如来像が祀られ、御師の先達で勤行を済ませると小休止を取る。宿を出て細い尾根筋を登れば辺り一面が開け植生が一変する。標高 1700 メートルを越えて森林限界を迎えた一面は笹原となり、白山開山の泰澄大師(たいちょうだいし)の母が女人禁制を犯して登るので大師が法力を使い、母を閉じ込めたという母御石(ははごいし)へと到着。ここには視界を遮るものはなく、北には白山山頂を構成する別山などの山並みが、東には日本海、南には石徹白郷はもちろん、美濃が一望でき、思わず歓喜の声をあげてしまうほどだ。(山)

第 31 回 白山信仰と袋井 19 袋井・浅羽からの白山巡礼 8

母御石(ははごいし)から先の稜線を通る禅定道(ぜんじょうどう)は、森林限界を超えるので樹木はなく、晴れると厳しい陽射しが、荒れると谷底から吹き上がる強風が直接身体に当たる厳しい難路だ。しかし穏やかな日は稜線からの景色は素晴らしく、大自然の雄大さに、しばし我を忘れさせてくれる。

銚子ヶ峰のピーク(1810 メートル)、一ノ峰のピーク(1839 メートル)、二ノ峰のピーク(1962 メートル)という三つの山とその間の鞍部をこえること 2 時間で、次の参籠所(さんろうじょ)の「水飲み宿」(1920 メートル)に着く。そこは標高 2128 メートルの三ノ峰との鞍部で、一番低くなったところから雪解け水が湧出している。これは、山中での貴重な水源となるので江戸時代初期までは、美濃馬場長滝寺(みのばんばながたきでら)の山伏達の籠堂(こもりどう)の置かれた場所だった。祠には金銅製の釈迦誕生仏が祀られている。遠州からの一行は、先達の指導で御開帳させてもらい、社前で勤行を済ませると、しばしの休息となった。

釈迦誕生仏は像高が 45 センチで元禄 4(1691)年に制作されここに納められている。台座には「白山水飲本尊願主心殊真宝上座 施主尾州春日井郡蓮花寺村鈴木次右衛門心鏡浄安信士 総伝妙善信女 遠州 三州 尾州 濃州 越州 右 五ヶ国 為 有縁 京堀川住筑後大掾常味作 元禄四辛未年十一月日」と刻まれており、現在の愛知県春日井市に居た故鈴木夫婦の、追善供養(ついぜんくよう・亡くなった人の冥福を祈り、故人になりかわって供養のために仏像や仏具、堂塔を作って納めること)のために、遠江をはじめ白山に参詣する多くの人々の寄付で、この仏像が納められたことがわかる。(山)

第 32 回 白山信仰と袋井 20 袋井・浅羽からの白山巡礼 9

じつは、白山へ至る険しい山脈の主稜線を縫って通じる美濃禅定道 水飲宿(みずのみしゅく)の本尊、銅製釈迦誕生仏を製作した鋳物師の常昧(じょうまい)が製作した大作が、袋井市内に現存する。それは山梨の西楽寺に祀られた銅製不動明王像(袋井市指定文化財)で、像高 129 センチメートル、台座を含めると 14 センチメートルにおよぶ大作で、台座側面には「七月吉祥日願主宥喜謹言 京堀川筑後大掾常昧作」「奉鋳立不動尊像一吃鉢奉讀法華經三千部供養寶永七庚寅」と刻まれ、宝永七年(1710)七月に僧宥喜が願主となって製作されたことがわかる。

この常昧(じょうまい)は鉦(かね・たたきがね)といった小物の金工品を得意とする鋳物師で、筑後大掾(ちくごだいじょう)という職名を名のるほどの職人の棟梁で、京都堀川七条通りに工房を構えていた(京都駅北口付近)。だから仏師ではない。そもそも、彼が製作した仏像というのは特異な存在だ。しかも、水飲宿の釈迦誕生仏は像高 45 センチメートルという小物。これと光背まで含めると 2 メートル近い西楽寺の大作では、鋳造技術は比較にならないほど、高度なものが要求される。

この不動明王像は鋳造仏であるにもかかわらず、ホゾとホゾ穴を設けた寄木造(よせぎづくり)の構造が採用され、それがあだとなって、つなぎ目が後世に折れたり、重みに耐えきれず台座が陥没していた。木彫の仏師に仏像製作の基本技術を教示してもらったのだろう。

仏師ではない常昧がなぜ、無謀にも西楽寺の不動明王像のような大作を製作することになったのだろうか？ それは謎だが、遠江、特に白山信仰が盛んで多くの参詣者を輩出した袋井の信仰がとりもった人脈が背景に存在するのなら、想像が大きく膨らむ。(山)

第 33 回 白山信仰と袋井 21 袋井・浅羽からの白山巡礼 10

水飲宿の釈迦誕生仏に別れを告げた遠州からの一行は、今日の宿泊地である別山室(べつさんむろ)に向かって、最後の難関である標高 2128 メートルの三ノ峰のピークを越すことになる。距離にするとわずか 800 メートルだが、この間に比高差 200 メートルを登らなければならない。

ようやくピークに立つと、眼前には幾筋にも刻まれた谷に残雪が斑に残る、厳しい表情の標高 2399 メートルの別山が立ちはだかる。「白山」とは単独の山の呼び名ではなく、最高点の御前峰(ごぜんがみね)・大汝峰(おおなんじのみね)と、少し離れたところにある別山との総称である。いずれも山の神が降り立つ聖地で、別山は虚空蔵菩薩(こくぞうぼさつ)の化身とされている。

美濃長滝寺や石徹白集落からは白山山頂の御前峰は見えず、この別山が美濃側にとっては白山の代名詞となる山で、長滝寺の詰所である「別山室」が置かれ、常駐の僧侶や山伏がいて白山牛玉宝印(はくさんごおうほういん)という祈祷札を護摩で炙って生を入れ、参詣者に配札する重要な拠点でもあった。

山頂では水が確保できないので、手前の雪解け水によってできた御手洗池(みたらいいけ)の傍らに宿坊となる大規模な山小屋、室(むろ)が営まれている。昔の室は廻りに石垣を積み上げ雪除け、風除けにしたもので今も一部で石積みが残っている。(山)

第 34 回 白山信仰と袋井 22 袋井・浅羽からの白山巡礼 11

別山室(べつさんむろ)の小屋で一夜を明かした一行は、出発後いきなり急斜面を 30 分近く登り、ようやく標高 2399 メートルの別山頂上の祠の前に立つことができた。ここからが「白山」の内となり、美濃から加賀の管轄に移る。

別山は「白山」を構成する三峰(御前峰・大汝峰・別山)の一つだが、終点の御前峰までの道のりは実に長い。山頂に立つと、白山最高点の御前峰が眼前に見えるはずなのに、夏場は霞が厚く覆うため、まず見えない。

写真のように別山から山頂までには、2200 メートルクラスの大屏風と呼ばれる断崖上を縫って延びる禅定道を通り抜け、油坂の頭というピークから一気に 200 メートル谷底に降り、くじけそうになりながらも再び 100 メートル這い上がって、白山南側の水源となる標高 2106 メートルの南竜ヶ馬場(なんりゅうがばば)に着く。この間、三時間以上が経っている。

最後の力を振り絞り斜面を登ること二時間で目的地の山小屋、標高 2448 メートルの室堂小屋に到着。室堂(むろどう)とは、山小屋の室(むろ)と、神仏を祀る堂とが合体したもので立山のものが有名だ。一行はここで荷をほどき昼食を取りながら最高点登頂に備えるのであった。(山)

第 35 回 白山信仰と袋井 23 袋井・浅羽からの白山巡礼 12

山頂下の室堂で疲れた身体を休めた一行は、翌朝御来光を拝むために 4 時前に起き出し、暗闇のなか、身支度を調べて山頂に向かった。山頂までは比高差 250 メートル、距離にして 800 メートルほどにすぎないが、何しろ空気が薄いせいで、身体が重く感じられ、山頂までは小一時間かかる。

5 時近くになると東の空が明るくなり、日の出前の朝焼けによって一面を覆う雲海が下から照らされ、この世の景色とは思えない幻想的な空間となる。

雲海の中からは乗鞍岳を始め北アルプスの山並みと立山連峰の先端だけが顔を出している。この壮大な曼荼羅空間に、ちっぽけな自分がいることに感涙し、手を合わせないではいられない。眼前には、浄土そのものがあるからだ。

しかし、浄土は陽が昇ってしまうと普通の景色に戻ってしまい、わずかな時間だけのできごとだった。興奮冷めやらぬ一行は、山頂を反対方向の加賀側に降り始める。山頂裏面は噴火口なので一面がガレ場となり、これまでの地形とは一変して草木が殆ど無く、池にも生き物が一切いない荒れ果てた死の世界が広がる。このように白山山頂には表の極楽の顔と裏の地獄の顔が共存している。世の中の現実の姿と同じ構図なのだ。(山)

第 36 回 白山信仰と袋井 24 袋井・浅羽からの白山巡礼 13

三山禅定への出発

山頂からは来た道を戻らず、噴火口内のガレ場を、足元を確認しながら、一步一步下ってゆく。白山地獄を通過する頃には辺りはすっかり明るくなって青空が広がっていた。

一行は来た道を引き返すのではなく、ここから加賀禅定道を 20 時間近く下り、白山比叡神社のある加賀馬場を経由して、北陸道を通り、国堺の難所で木曾義仲の平家との戦いで有名な倶利伽羅峠を越えて、越中国に出、富山城下を抜けて常願寺川沿いに登り、立山の岩峯寺(いわくらじ)へと向かう。ここで身支度を調べ、立山先達の指導で立山室堂から山頂浄土へと歩みを進める。

下山後は→越後との国堺、親不知・子不知の難所を越え、信州戸隠山→長野善光寺→甲斐善光寺→富士吉田→富士山山頂→富士浅間宮を経由してようやく袋井に戻る長旅へと出発するのであった。

これは三山(白山・立山・富士山)禅定と呼ばれ、室町時代に成立した中日本を廻る我国最大規模の巡礼で、江戸中期以降隆盛となった全日程約三ヶ月の長旅で、袋井周辺からも多くの参詣者が歩いた。

現代とは違って、旅は生涯に数度しかできなかったから、霊山・霊場の巡礼は庶民にとって、数少ない「日本」を知るチャンスであった。登山という近代スポーツは明治以降もたらされ、気軽に楽しめるようになるのは、昭和 30 年代以降になってからであった。ー終りー (山)

第 37 回 熊野信仰と袋井 1 海の熊野と袋井

静岡県のなかで、最も熊野系の寺社が集中しているのが袋井市域であることはほとんど知られていない。それは、市域を太田川・原野谷川の両河川が蛇行して流れ、しかも合流せず、河口は現在と違って直接遠州灘へはつながらず、横須賀との堺、0メートル地帯に溜まって潟湖(ラグーン)を形成し、これを利用した船運の要衝として重要視されたからで、遠江国衙や伊勢・熊野山領へ税物が運ばれる海の幹線道路であったからだ。

こうした背景から、遠江国最古の熊野山領として山名荘(やまなのしょう)が平安末の12世紀には成立し、荘園内や太田川・原野谷川の流域に多くの熊野系寺社が設けられ、天台・真言の密教僧をはじめ、紀伊国からは神職や修験者・聖などが移り住んだ。

下熊野というと青岸渡寺のある那智滝や熊野川の中洲に祀られた熊野本宮、熊野川河口の新宮と火祭で有名な、ゴトビキ岩の「熊野三山」、つまり「山の熊野」をイメージするが、その根源には、古来、海の彼方の常世と呼ばれたカミの世界から寄り来る、福をもたらすと信じられた漂着神・漂着仏への信仰があり、今も浦々や岬(御先・ミサキ)先端には祠を持たない社(やしろ)が無数に存在している。

浅羽の西同笠・大野・中新田には寄木神社という、この海の熊野神を祀った神社が存在する。その原型の一つがリアス式海岸の続く須野湾にある寄木神社だ。縁起によると「神様が丸太に寄りかかって須野湾に流れ着いた」とし、流木を御神体として祀る「寄木神」の最も原初的な祭祀形態を留める杜が今も守り継がれている。(山)

第 38 回 熊野信仰と袋井 2 海の熊野と袋井

寄り来るカミをまつる 1

浅羽と横須賀との境には、弁財天川という流れがほとんどない川が存在する。それもそのはずで、これは内陸部に深く入り込んでいた潟湖(せきこ/ラグーン)の名残で、大地震に伴う地盤隆起や、堆積物によって水域が次第に陸化したからだ。

17 世紀初めまでの原野谷川と太田川は合流せず、しかも、今とは違い直接海に注ぎこむ川ではなかった。川を流れてきた水は海岸に堆積した分厚い砂堤に阻まれ、現在の 150 号線の南に溜まり、広大な湿地帯や湖を形成しており、弁財天川河口付近が唯一潟湖の入り口となって遠州灘に通じていた。

ここが海の熊野と繋がる唯一の扉でもあり、先号で紹介した寄木神は、この扉の両側に祀られている。東側が沖ノ須村の寄木大明神、西側が西同笠(にしどおり)村の寄木大明神である。明治初期の神仏分離令によって、社名は寄木神社、祭神もスサノヲノミコトに変更となり、歴史的な経緯が不明となってしまったが、この信仰の根源は、海の熊野の信仰に通底し、海のかなたの観音浄土から流木に乗って寄り来るカミを祀ることにより、人々に福をもたらしてくれるという漂着信仰が背景にあった。

寄木大明神、現在の寄木神社はこうした海の熊野の基層信仰から成り立っている。(山)

第 39 回 熊野信仰と袋井 3 海の熊野と袋井

寄り来るカミをまつる 2

浅羽地内には、三ヶ所の寄木社が存在している。西同笠(にしどおり)・大野・中新田の三社で、このうち本社が西同笠で、これについては前回紹介した。

大野は江戸時代には同笠新田村と言い、中新田村と共に 17 世紀後半に同笠村から新田開発によって分村し新たに造った村で、村を拓くときに、鎮守の寄木大明神を勧請(かんじょう/祀神を分祀すること)して成立した。

両社共に社地は集落の北西隅、乾(いぬい)の方角とした。乾とは我国古来の鬼門で、異界に通じる方角とされ、旧家では乾の方角に、祖先神を祀る地の神の祠を置いた。つまり村全体の地の神の役割を果たしている。

平成 5 年に中新田寄木神社本殿を新調するにあたって資料調査を行い、古くなった祠の内陣幕に「元禄十三年庚辰九月 牧野氏」と墨書の文字が記されていることに気付いた。

神社を管理する祢宜屋(ねぎや・ねんや)の家には『中新田寄木大明神由緒書』という祭神にまつわる縁起書が伝えられている。これには「元禄 12 年 8 月 15 日の大風と高潮によって横須賀藩領内の海沿いの堤と海へ注ぎ込む河川の堤が大破し、翌年春から藩主の命により復旧工事を進めた。藩士牧野久森が 5 月 9 日に中新田村の状況を視察したおり、海岸に観音菩薩の木像が流れ着いているのを偶然見つけた。前年の高潮によって御神体ごと社が流失したので、新たな仏像が流れ着いたことを大変驚き、祠を建て替えてこの観音像を祀り 9 月 19 日に納めた」とある。幕と由緒書の両方からそれが事実であったことが判明した。

仏像は明治初期の神仏分離令によって処分され、牧野氏が納めた幕も、神社新築によって処分されてしまったが、縁起だけは歴史を語る証人として今も伝えられている。寄木神を観音菩薩として祀ることは海の熊野に直結する思想であった。(山)

第 40 回 熊野信仰と袋井 4 海の熊野と袋井

熊野の寄り来るカミ

「熊野」という音の響きを聴いたなら、たいていの人は和歌山県の熊野地域だと理解してしまうだろう。ところが実際は三重県側も含めた広大な範囲に及び、熊野市という名を付けた行政区は三重県側にある。

袋井にゆかりの深い「海の熊野」は、むしろ三重県側の海辺の漁村のあちこちに、独特の文化遺産を残している。その一つが三重県尾鷲市賀田町の浜部に張り出した島状の砂州に繁茂する巨樹群を、海の彼方から寄り来るカミの依り代(よりしろ)として祀ることから始まる飛鳥(あすか)神社だ。

スカとは砂州を指し、そこに自生する樹木には斧を入れることが禁じられた。つまり、自然のままの空間を残した神の領域というわけだ。

もう 1 箇所紹介しよう。尾鷲市中心部へ入る湾入口の大曾根浦には、自然林が生い茂る岩山状の陸地に貼り付いた島がある。もちろん、社という人工物は存在しない。ここは尾鷲地方一の神社である、尾鷲神社(大宝天王社)御神宝の獅子頭(熊野権現の神霊は獅子頭を依り代とする場合があり、これを祀った神事がとりおこなわれる)が打ち上げられた神聖な場所とされる。

その先端には、「夫婦岩」と呼ばれる大小二個の岩塊が海中より突き出し、今も一年に一回、注連縄を張り替える神事が続けられている。寄り来るカミを祀る空間の原型とは、このような自然物であった。(山)

第41回 熊野信仰と袋井 5 海の熊野と袋井

王子神社誕生

海の彼方から寄り来るカミのなかから、「王子神(おうじがみ)」として祀られるものがあらわれる。世界遺産に登録された大辺路(おおへち)・中辺路(なかへち)・小辺路(こへち)という熊野への参詣道沿いには「熊野九十九王子(つくもおうじ)」と呼ばれる多数の王子神を祀る藪や社、磐座が散在している。熊野詣とは、これら古道沿いの諸王子を巡拝しながら、熊野への苦行と滅罪の歩みを運ぶ道であることが独自の特徴とされる。

初回(2013年4月号)で紹介したように、山名荘が熊野山領であった関係で、袋井市域には多くの熊野系社寺が存在し、王子神を祀る社は多い。その代表が木原権現と浅羽地区の諸井・富里王子権現だ。これからしばらくのあいだ、この王子神の源流と袋井の関係を紹介してゆこう。

三重県熊野市にはイザナミノミコトの奥津城(おくつき・御霊の鎮まるところ)とされる、世界遺産「花の窟(はなのいわや)」がある。その歴史は古く『日本書紀』にすでに、ここがイザナミノミコトの奥津城で、「花の頃には花を以てまつるので、花の岩屋という」と記されている。現地を訪ねると海岸に突き出た丘陵先端が一枚の岩盤となっており、垂直に切り立った岩肌の裾に白い玉石が敷き詰められて区画をなし、それを祭壇としている。祠などの人工物は一切存在せず、圧倒的な存在感がある岩自体が「はなのいわや」という神霊の依り代である。

神仏の融合が進んだ鎌倉時代には「大般若の鼻」と仏教的な解釈もなされるが、「花」という言葉の意味は、丘陵先端の端＝はし→はな→鼻→花(華)で鼻とは神霊が降下する時に目印となる岩の突起を指している。この窟の傍らには王子神の原型を知ることができる王子岩屋が存在している。(山)

第 42 回 熊野信仰と袋井 6 海の熊野と袋井

王子の岩屋

『日本書紀』『古事記』に記された神話の世界が体験できるとあって、花の窟を訪れる観光客は多い。しかし、その傍らにある、王子の岩屋を認識できる人はまずいないだろう。

花の岩屋の祭壇の反対側に一回り小さな祭壇がある。その背後には一周 10 数メートル、高さ 4 メートル程の岩塊があり、これを神を迎える座、磐座として祀っている。よくみると、岩塊の上には突起状の岩が飛び出しており、これこそが神界から神霊を迎える座、鼻=花(はな)というものであることがわかる。さて、これは何者だろうか。

平安時代中期の増基法師(ぞうきほうし)という旅の僧侶が残した熊野地方最古の紀行文『いほぬし』には「ようやく花の岩屋の根本まできた。見ると、岩屋の山の中には幾つも穴を空け経典を納めている。これは弥勒菩薩が出現する来世に残すために納めるもので、天女が下ってきて供養するという。良くみると、この世に似た場所はなく供養の卒塔婆が埋もれたところさえある。傍に王子の岩屋というものがある。ただ、松の木だけが生えた小山で、その中に色の濃い紅葉が含まれている様子は、実に神の山というにふさわしいものだ」と記している。

花の岩屋とは、「岩の住まい」という意味で母神の住みか、その傍らには子供神の住みかである、「王子の岩屋」があるという構図だ。この王子神がのちに単独で社で祀られるようになり、熊野信仰が盛んな袋井にも伝えられ、現在も地域で祀られている。(山)

第 43 回 熊野信仰と袋井 7 海の熊野と袋井

富里(鳥羽野村)の王子社

そろそろ地元の話しに取りかかろう。遠州灘に注ぎ込む河川の一つに原野谷川があり、その流域には海の熊野とつながる王子神と寄り来る神が随所に祀られ、痕跡が今も残っている。その一つに西浅羽地区の富里(とみさと)がある。

富里は明治以降の新しい地名で、江戸時代の村組織では鳥羽野(とばの)村と名乗っていた。それ以前は、南の中野村(磐田市中野)とひとくくりの土地で、室町時代には「苫野中野郷(とまのなかのこう)」という地名であった。

この郷の鎮守様に王子権現がある。神仏が一つになっていた時代なので、祭神は熊野若一王子権現(くまのにゃくいちおうじごんげん)という尊称で、そのお姿は、白木の十一面観音坐像という仏様である。そもそも権現という考え方は、見えないものが仮に姿を顕わした状態を表現する「化身」という言葉から始まり、権化(ごんげ)という言葉に通じる。それが 10 世紀初めに比叡山の天台僧により「権現」という概念に統一されてできた。山や自然に宿る精霊が形を顕わしたもので、熊野の山・海の化身が熊野三所(さんしょ)権現というわけだ。

富里の王子社には、明治元(1868)年まで室町時代に製作された仏像が祭神の若一王子権現として祀られていた。熊野神の子供神(若宮ともいう)で、若一とは、長男と理解すればよい。由来は次回に示そう。(山)

第 44 回 熊野信仰と袋井 8 海の熊野と袋井

富里(鳥羽野村)の王子社

富里王子社の祭神は、若一王子権現(にやくいちおうじごんげん)という神と仏が合体した状態を顕わす権現様で、お顔の上に化仏(けぶつ)という化身を十体載せて合計十一の顔が表現された十一面観音坐像だ。

これは仏の持つ働きを象徴したもので、それほど多くの働きを同時におこなう能力を顕わしている。本来なら全身を表現しなければならないが、頭だけ付けて省略している。

観音像は一本の木を彫り込んだ、一木造(いちぼくづくり)の木彫仏で、高さ 42.5 センチメートルと小ぶりの可愛らしい仏さまだ。製作年代は室町時代で、持仏の蓮の花も当時のものである。

仏様の表面は金色に光り輝いているので、金箔が押され、着衣も彩色が施される。これに対し、この像は彩色が認められるのは髪の毛と眉毛、目、唇だけで、最初から白木のままの姿になるよう意識して造られている。底を見ると、身体を中心に木材の芯が来るように木取りされ、荒い鉋の削り痕をそのままにした仕上げで、御神木を使って彫られたものと考えられる。

この十一面観音像は「仏の姿をした、神」という表現がふさわしい典型的な神仏習合(しゅうごう)の像である。

このように、お宮の祭神として祀られる仏を、本来の姿が仏であるという意味から、本地仏(ほんじぶつ)と呼び、平安時代後期以降には、お宮の多くが本地仏を祀っていた。(山)

第 45 回 熊野信仰と袋井 9 海の熊野と袋井

富里(鳥羽野村)の王子社

富里王子社本殿内には、「宮殿(くうでん)」と呼ばれる、仏さまを納める厨子(ずし)が残されている。「宮殿」という字だけを見ると、普通は「きゅうでん」と読んでしまう。しかし、あえて「くうでん」と読ませて、高貴な方の住まいである実際の宮殿とは区別している。厨子と宮殿との違いは、厨子が単純な箱形であるのに対し、宮殿は社寺建築に準じて制作されたもので、屋根に瓦の表現を施し、軒下には垂木や組み物という細部の意匠まで表現した、かなりリアルなものまで造られた。

王子社の宮殿は高さ 113.5 センチメートルの小ぶりのもので、屋根は檜皮葺(ひわだぶき)で曲線の美しい唐破風(からはふ)となり、壁は白木で観音開きの扉には、鍵金具が描かれた神社建築の意匠で作られており、仏の姿をした王子神が祀られるには、ふさわしい宮殿である。こうした宮殿が本殿内中央に祀られているということは、王子社の御神体が本地仏(ほんじぶつ)という仏の姿であったことを物語っている。

扉を開けると、中には何も祀られていなかった。43、44 回で紹介した室町時代の十一面観音坐像がここに祀られていたからだ。実は、明治元年の神仏分離令が実行され、宮殿から追い出され、堀に投げ入れられたが、信仰心篤い住民が、村内の松秀寺に密かに納めたという話が伝わっている。

仏様の表面は金色に光り輝いているので、金箔が押され、着衣も彩色が施される。これに対し、この像は彩色が認められるのは髪の毛と眉毛、目、唇だけで、最初から白木のままの姿になるよう意識して造られている。底を見ると、身体を中心に木材の芯が来るように木取りされ、荒い鉋の削り痕をそのままにした仕上げで、御神木を使って彫られたものと考えられる。

平成 17 年に資料館で行った特別展「遠州の熊野信仰展」では、宮殿と十一面観音像を組み合わせで展示させてもらった。138 年ぶりにお住まいに戻られた観音さまが喜んでおられるように感じ、それが今も忘れられない。(山)

第 46 回 熊野信仰と袋井 10 海の熊野と袋井

富里(鳥羽野村)の王子社

富里王子社には、室町時代の獅子頭が伝えられている。ところが、この獅子頭は獅子舞で使われるものと違って、内部が空洞ではなく、舞い手が被ることができない構造となっている。

実は、獅子頭には 2 種類ある。一般的なのが、内部が刳り抜かれて被るもので、これは獅子舞を舞うための頭だ。これに対し、富里王子社のように刳り抜かれず、獅子の頭の形を彫り出しただけのものがあり、これは祭壇に祀られる。つまり、この頭は祭祀時に祭神である熊野若一王子権現(くまのにゃくいちおうじごんげん)の神霊を迎える依り代(よりしろ)なのである。

「祈り」という言葉は意志のイ、つまり、「イリキ(意力)」を乗せて神に届けるという言霊(ことだま)から始まる。こうした神事を見ると、神を迎えてもてなす、マツリの原型を実感することができる。

熊野信仰発祥の地、紀伊半島ではこうした神事は消えてしまったが、沿岸部には獅子頭が流れ着き、それを祀って神社が始まったなどという縁起を持つ社があり、獅子頭を御神体同様に扱っている。富里王子社の獅子頭は、このような熊野信仰の伝播を示す大切な証なのだ。(山)

第 47 回 熊野信仰と袋井 11 海の熊野と袋井

富里(鳥羽野村)の王子社

富里王子社に伝わる室町時代の獅子頭の底一面には、「維時正保三丙戌年七月吉日奉修補獅子頭願主長田症司作」と墨書で修理銘が記されている。奉の上にある 4 つのチョンは四天王の略で結界を示し、本尊や主祭神の名称の前に加える。結界が記されることにより、この頭が権現の依り代であることが明確だ。

銘から江戸時代前期の 1646 年(正保 3 年)に修理されたことがわかるが、願主を存在しない「長田庄司(おさだしょうじ)」とすることが実に作為的な銘文だ。

西浅羽の鳥羽野村(富里地区)を拓いたのは永田一門という。一門に伝わる起源伝承に「先祖は平安末期に尾張国知多郡野間荘の荘司(荘園の代官)を務め、長田姓を名乗っていた。長田忠致(ただむね)は平治の乱に敗れた源義朝父子をかくまっていたが寝返り、湯殿で殺害し、首を平清盛に差し出して恩賞として壱岐守に任じられた。のちに、義朝の息子である頼朝が平家を壇ノ浦に滅ぼし、鎌倉より上洛する途中で、今度は長田父子を捕え板礫(いたはりつけ)にして処刑した。残った長田一族は各地に隠れ、その子孫の一部が鳥羽野村に住み、長田姓をはばかり永田姓を名乗った」という。

残念ながらこれを裏付ける記録は存在しない。鳥羽野村は旧原野谷川と旧太田川の合流工事後の 17 世紀初めに成立した新しい村で、それ以前の集落は村の南外れにある王子権現社南側一帯がその跡で、直接は繋がらない。しかも、王子権現社本地仏の十一面観音像も獅子頭も室町時代の作品で、伝承の時代とは 300 年近い隔たりがある。この伝承を裏付ける遺品として、正保 3 年に神社関係者が「願主 長田荘司作」と書き込んだというのが実態だろう。こうして「歴史」が新たに作られる。地域の歴史を紐解くにも細心の注意が必要だ。(山)

第 48 回 熊野信仰と袋井 12 海の熊野と袋井

中野白山社の熊野権現

富里王子社に関連して紹介しておかなければならないのが南に隣接する中野村だ。行政区域では磐田市となっているが第 47 回で紹介したように、現在、富里地区と呼ばれる鳥羽野村や南の豊浜地区は 17 世紀初頭の旧原野谷川・旧太田川の合流工事が行われた後に成立した新しい土地で、神社の場所も新しい村の造営にあたり現在の場所に設けられたものだ。それ以前の村は、現集落よりさらに東側に存在し、今は島畑や田んぼになっている。しかも、当時は「苫野中野(郷)」という一まとまりの土地だった。

苫野中野郷(とまのなかのこう)には、西光寺(さいこうじ)という熊野権現を祀る中世の寺院が存在し、その系譜は現在、「中野白山神社」として名を変え、形を変えながらも続いている。実は、東海地方では 15 世紀に美濃(美濃馬場と言い、現在の岐阜県郡上市白鳥町)白山長滝寺を拠点とする白山信仰が急速に広がり、かつての熊野先達(くまのせんだつ)と呼ばれた熊野系の山伏が、利益が上がるので白山先達をも兼ねて教線を拡大したことから、熊野・白山信仰が重なって残る寺社が意外と多く、中野がその良い事例だ。

130 年ぶりに本殿の扉前に鎌倉時代の釈迦十六善神像を掲げて、熊野権現の祭祀状態を復元してもらった。西光寺は熊野本宮の祭神である阿弥陀信仰を中心としたもので、神前に仏の図像を掲げ、大般若経を大声で読み上げる神事が盛んに行われていたわけだ。(山)

第 49 回 熊野信仰と袋井 13 海の熊野と袋井

中野白山社の熊野権現

中野白山社には寛正三(1462)年の年号を墨書した懸仏(かけほとけ)が祀られている。懸仏というのは学術用語で、歴史的には「御正躰(みしょうたい)」と呼ばれた。つまり、寺社に祀られている仏に対して、それと同じ図像の御正躰を作って奉納する。観音が祀られているなら観音菩薩の御正躰を納める。その目的は父母や先祖供養、自分自身の滅罪である。

社には明治初期の神仏分離以前には仏像が祀られるのが一般的だったので、本殿の内壁には無数の御正躰が掛けられているところも珍しくなかった。中には祠の中に納める御神体そのものとして、祀られる事例もある。遠江にはあまり残されていないが、それでも鎌倉時代から南北朝にかけてのものが、北遠の山間部を中心に残されているが、中野は海岸平野における希少な事例といえる。

では詳しく観察してみよう。この懸仏は直径約 30 センチの円形板の表面に銅板を巻いて鋳で固定し、中心部に半肉彫の仏の姿を貼り付けている。裏側の板面には 82 文字の墨書が記され、判読できない文字があるが、その内容は「苫野中村に所在する天用寺の住僧 寛谿叟(かん けいそう)は熊野三山に参詣し熊野本宮・新宮で湯立て神事を行い、熊野の山の神様が仏の姿でお出ましになった観世音菩薩の御神体を製作し、その力で子孫が代々繁栄し災難からも守られることを祈念してこの地にお迎えする。寛正 3 年(1462)4 月の吉日に謹んで申し上げる」というものだ。

この銘文内容はこれまであまり問題視されなかったが、2 点で検討を要し、それが当時の熊野信仰の実態を解明する糸口になるとにらんでいる。(山)

第 50 回 熊野信仰と袋井 14 海の熊野と袋井

中野白山社の熊野権現

中野白山社に祀られる寛正三(1462)年の懸仏(かけほとけ)裏面に記された墨書内容のうち、検討が必要な2点の一点目が苦野(とまの)中村に所在する天用寺の住僧 寛 谿叟(かん けいそう)についてだ。これは中国式の僧名で禅僧である。禅僧が熊野本宮・新宮に参籠し、湯立て神事を行い、熊野の山神が仏の姿で顕れた観音の姿をはめ込んだ懸仏を迎えて祀るという宗教行為には違和感がある。なぜなら、この行いは真言・天台の密教僧のものであるからだ。

二点目は、なぜ観音菩薩なのかだ。熊野三山の神が仏の姿で顕れると、本宮は阿弥陀、新宮は薬師、那智は千手観音として出現する。谿叟が参籠したのは本宮と新宮なので、本来なら阿弥陀か薬師のはず。しかし、山の神の本地として実際に迎えたのは観音。しかも頭に化仏をたくさん載せた十一面観音像のようだ。

熊野三神は平安時代後期に子供神や一門の神を含めて12神で祀られ、「熊野十二所権現」と呼ばれるようになる。このうち若宮は特別扱いで熊野三神と同格に祀られる。その実態は天照大神の化身で女神姿、仏として顕れるときは十一面観音の姿になるとし、この思想の背景には、熊野と伊勢が同体であるという熊野側の主張がある。

谿叟が苦野中野の地に迎えた観音とは、アマテラスでもある観音だったと考えられる。すると、富里王子社の室町時代の本地仏が十一面観音座像なのと共通する。伊勢神宮の御厨領(みくりりょう)が所在する太田川河口流域にはアマテラスの信仰が広がり、熊野と融合していたようだ。(山)